

注

- 1) E.G.サイデンステッカー、那須聖共著『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』（培風館、1962） p. 61
- 2) *Longman Dictionary of Contemporary English* (Longman Group Ltd, 1995)
- 3) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (Oxford University Press, 1995)
- 4) 『岩波国語辞典 第三版』（岩波書店、1982）
- 5) 『広辞苑 第四版』（岩波書店、1991）
- 6) Joseph J. Shipley, *Dictionary of Word Origins* (Maruzen Co. Ltd, 1968)
- 7) 2) に同じ
- 8) 4) に同じ
- 9) 2) に同じ
- 10) 同上
- 11) 池田彌三郎、ドナルド・キーン監修『日英故事ことわざ辞典』（朝日イブニングニュース社、1982）
- 12) 『日本国語大辞典』（小学館、1981）
- 13) 鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波書店、1973） p. 168

（本学教授）

移すのだ。子供から見て、パパと呼べる人だから、彼女からもパパと呼ぶのである。この際重要なことは、彼女は子供と心理的に同調し、子供の立場に自分の立場を同一化しているという点である。子供の立場、子供の視点へのこの歩みよりを、私は共感的同一化 (empathetic identification) と呼んでいる。

またこれに関連する事であるが、日本では母親は幼児の前では「ぼんぼん」「あんよ」「わんわん」などという言葉を使う。このような幼児語は日本語には多いが、英語には少ない。これは幼児にとって「足」と言うよりも「あんよ」の方が言い易いということではなかろう。「足」と初めから教えれば幼児も「足」と言うであろう。母親が手を取って幼児を歩かせる時、「あんよはお上手<sup>じょうず</sup>」などと言いながら、母親が幼児と一体化し、幼児と一緒に夢の世界を造って、自らがメルヘンチックな世界に浸っているのであろう。日本の家族（特に親と子）の強い結びつきを示す「融合の文化」の一例がここにもある。

### 13. おわりに

日本においても、また他の多くの国においても、家族は人間関係の基本となる単位であり、人々の日常の行動規範の基本が作られる場である。かつては、家庭はすべての機能を持ち、生きるためのあらゆる術をここで学んだ。しかし現代は、家庭はあっても家族が存在しないという状況を生み出した。核家族化や女性（主婦）の社会進出も進み、家族の人間関係も大きく変容した。さらに若い男女の結婚願望も薄れてきており、単独世帯の増加も目立っている。その上DINKSや夫婦別姓も相俟って家族観や人生観も変化している。

しかしながら家族に関する語彙や表現はそう簡単に変わるものではない。「茶の間」「ちゃぶ台」「一姫二太郎」「総領」「分家」などの語彙は消滅しつつあり、「ディンクス」「ブライバシー」「シングルライフ」「バチャラーガール」などの外来語が流入してきてはいるものの、brotherのように「兄」「弟」を区別しない語はいまだに生まれていないし、「長男」「次男」「嫁」「姑」「婚期」といった言葉を依然として日常使用している。また「先輩」「後輩」といった言葉は多用され、「先生」という敬称はさまざま人に使われている。言語は各国、各時代の人々の発想や文化を反映するものであり、語彙はその言語社会における森羅万象、諸事象の切り取り方を反映するものであるから、本稿で取り上げたような文化のエトスを示すとも言うべき語彙の日英比較を通して、日本と英語圏の文化比較を試みることは興味深くかつ有意義であると考えられる。今後も色々な分野の語彙を取り上げて研究を続けていきたい。

basis (terms).と言えるのが友人になった証拠となる。

家庭の中においても、日本では上下関係を基礎にして呼称が決まっている。自分より年上の人に対しては自分との関係を示す名称で呼びかけなければならない。しかし自分より年下の者に対しては名前 (first name) で呼びかけるのが原則である。弟は兄に「お兄さん」と呼びかけ、兄は弟に「正夫」と呼びかけ、「弟」とか「弟ちゃん」とは言えない。「お父さん」に対して、父が「何だい、息子」とは言わない。おじ、おばとおい、めいなどの場合も同様であり、家族外においても、「先生」に対して「生徒」という呼称はないし、「社長」に対して「社員」という呼称もない。

日本のイエ制度下においては、山田太郎にとって山田家の一員である(山田家に所属する)ということが大切なことであり、太郎は山田家の中における識別のための名前に過ぎない。だからsurname, family name, last nameに対する日本語は「姓、名字、苗字」であるが、first nameに当たる特別な日本語がないのである。だから英和辞典ではやむを得ず「ファーストネーム、(姓に対して) 名」などとしている。英語ではfirst nameのほかpersonal name, given name, Christian name, baptismal name, forenameなど、名字よりも多くの言い方がある。日本では名字が大切であり、昔は身分の低い者には名字は与えられていなかった。「名字帯刀御免」という言葉もあり、これは江戸時代、百姓や町人に名字をとない、刀をさすことを特別に許したことを指す。欧米人にとっては、家族の中でTomとかMaryが自分の名前であって、SmithやBrownのようなsurnameは、所詮groupの名前であり、自分の名前ではないと考える。日本人の場合には、山田太郎にとって、山田家に属するということが重要であるのと同様に、社会にあつては「山田太郎」よりも、「三菱商事の山田」ということが重要なのであり、日本人の集団帰属性を示すものである。

外国人にとって、日本人が使う自称、他称で不可解なものがある。子供ができると母親は自分の夫を「パパ」とか「お父さん」と呼び、子供に対しては「お母さん買物に行って来ますよ」と言う。また子供の前では祖母は自分の娘のことを「お母さん」と呼ぶようなふしぎな呼称が生まれる。鈴木 (1973) はこの現象を「日本人が家族の間で使う親族名称の一見不可解な虚構的用法」と呼び、次のように述べている<sup>13)</sup>。

私はこの用法を次のように解釈することを提案してきた。妻が子供の前で夫のことに、パパとか「おとうさん」と言及できるのは、彼女が心理的に子供の立場に同調するからである。彼女は、自分自身の立場から見れば夫でしかあり得ない人物を、子供の見地を経由して見直すのである。つまり、彼女は自分が使うパパという自己中心語の原点を、子供に

『子を持って知る親の恩』 Only after a person has become a parent himself does he realize how indebted he is to his own parents.

結局「親の恩」もdebtやownを使って表現するしかないことになるが、debtの語源はラテン語で「支払うべきもの」で、第一義は「借金、負債」である。しかるに親の恩は金銭で買えぬものである。『日本国語大辞典』によれば「恩」の第一義は「目上の人から受ける感謝すべき行為。めぐみ。なさけ。いつくしみ。」とあり<sup>12)</sup>、英訳できない概念である。だから「親の恩」とは言うが「子供の恩」という言い方はない。「恩師」も英語に訳せば、one's former teacher (以前習った先生) または単にone's teacherとなり、「小学校時代の恩師」ならone's teacher in the primary school daysとなるが、日本人にはこれでは物足りない。

現代でも「恩」や「義理」「人情」を根底とする日本語表現はよく使われるが、英訳不可能な場合が多い。例えば「私はおじの家に厄介になっています」はI'm staying *with* my uncle. となる。また筆者が大学院生の時、あるアメリカ人の先生が私に“So, you are going to write a thesis *with* Dr. Gerhard.” (それでは君はゲルハード先生について (の指導の下で) 論文を書くのだね) と言った。この二例の英文の中のwithの使い方は、恩や義理を重んじる我々日本人には、何か物足りないものであり、また相手に対して義理が立たない (失礼) と感じる表現である。

## 12. 家族の呼称について

日本人の子供が父親の転勤などで欧米の学校に入学すると、教室で「先生!」と言う時“Teacher!”と呼びかけてしまうことが多いと言われるが、英語ではこのような言い方はせず“Mr. Smith!”などと言えよ。しかし日本では、先生に「山田さん」などと生徒が呼びかけることは失礼であり、「山田先生」とか「先生」と言わなければならない。会社でも社員が社長に対して「お早うございます。山田さん」と言ってはいけないのであり、必ず「社長」と呼ばなければならない。タテ社会の日本では、目上の人に対しては、自分との関係を示す名称で呼びかけ、自分と相手との関係を明確にしなければならないのであろう。欧米のpartyは多くの人と知り合い、また自分の友人を確認するためのものであるが、日本の宴会などは、お互いの上下関係を確認し、またそのような上下関係を一時忘れて打ち解け合うためのものであろう。しかし、いくら無礼講であっても社長には社長、課長には課長と呼びかけなければならないが、欧米ではpartyで知り合い、友人になれば、以後はfirst nameで呼びかけられるし、またそのようにfirst nameで呼びかけられる友人が自分にどのくらいいるかによって、その人の生活がどの程度happyであるかが決まるのである。We are on a first-name

いのである。英語ではHe respects his children.ともHe respects his son's opinion.とも言えるわけである。

## 10. 「親孝行」と filial duty

「親孝行」は『広辞苑』によれば「子が親を敬い、親によく尽す行い」となっているが、この「孝行」の概念は英語にはない。親に尽すという考えはないわけではないが、「孝」の意味とはズレがある。和英辞典では「孝行」はfilial duty [piety]となっているが、この句を実際に使うことはほとんどないであろう。したがって「孝行」についての日本文を英訳すれば次のようになる。

「親には孝行しなさい」 Be a good son [daughter]. Try to make your parents comfortable. Be good [thoughtful] to your parents.

「彼は孝行息子だ」 He is a good son. He is devoted to his parents.

英語のdutyは、人を敬い、その人のために尽すこととは異なる。dutyの意味はLDCEには次のようにある<sup>10)</sup>。

something that you have to do because it is morally or legally right.

したがってdutyは「(道徳的、法的に) 人間として行うべき義務」であり、「(特定の) 任務、職務」や「税、関税」にもなり、「孝行」とは大きくかけ離れる。また pietyはLDCEによれば respect for god and religionとなっており、これは「神を敬う心」である。

## 11. 「恩」と obligation, kindness

「父の恩は山よりも高く母の恩は海よりも深し」ということわざがあるように、日本人は「親の恩」や「師の恩」を大切にしてきた国民であり、我々はよく人に恩を感じたり、恩を着せたりする。しかし「恩」という概念も英語にはないものである。強いて英訳しようとするれば、一般に人から受けた恩はobligationやa debt of gratitudeとなり、人に施す恩はkindnessとなる。「親の恩」はone's debt to one's parents; what one owes to one's parentsとなる。

恩についてのことわざは日本には多いが、『日英故事ことわざ辞典』は次のように英訳している<sup>11)</sup>。

「父の恩は山よりも高く母の恩は海よりも深し」 One's debt to one's father is higher than any mountain; that to one's mother is deeper than any sea.

い少女でもprivacyを大事にしているのである。

筆者は日本文化を「寄せ鍋文化」と呼びたい。日本人の好きな料理（特に冬）は鍋物である。色々な具がごったに入っていて、皆でつついて食べるのである。スイスにはフォンデュという料理があるが、このように皆でつつく料理は欧米にはほとんど見られない。日本人の好きな、皆で足を入れて暖まる「こたつ」も、一つの部屋に皆で寝る「雑魚寝」も、皆で一緒に入る「銭湯」や「温泉」も、昔の子供の遊びの「押しくらまんじゅう」も、みな「寄せ鍋文化」と考える。酒を飲む時、自分で自分の酒をつぐ「手酌」はぶざまでわびしいものであり、「差しつ差されつ」が理想的な飲み方である。欧米には人に酒をついであげる習慣はない。自分でついで自分のペースで飲むのである。だから欧米にはふつうビールは小瓶か缶ビールしかない。日本の大瓶は二人以上で飲むためのものである。ある時は二人で、ある時は大勢で、各自の個性を殺して溶け合い、一体となる「融合の文化」がここにもある。

## 9. 「尊敬する」と respect

「尊敬」は『広辞苑』には「他人の人格・行為などをとうとびうやまうこと」とある。このように日本の「尊敬」は上下の関係を基礎においており、自らを下にして上を見上げる表現である。それによって相手を尊び敬うことになる。日本のタテ社会においては、このように上下の軸を基本にした表現が多くある。「敬う」「慕う」「感謝」などは下から上への言葉であり、「感心」「御苦勞様」「可愛がる」などは上から下への言葉である。また「怒り」とは異なり「逆鱗」は目上の人の怒りを示す。尊敬語と謙讓語の使いわけも難しい。「御高著」と「小著」、「貴社」と「小社」、「玉稿」と「拙稿」などのように、常に自己を小さくし、卑下しなければならない。

しかし英語のrespectは、このような上下の立場に関係なく使える語である。LDCEはrespectの意味を次のように説明している<sup>9)</sup>。

to admire someone because they have high standards and good personal qualities such as fairness and honesty

つまり誠実で信頼できる人間として相手を認め、日本語の「尊敬」のように距離を置かず、むしろ親しみをもって接することがrespectである。また相手の考えや意見を正しく評価するのもrespectであり、これも日本語の「尊重する」のように上下の軸を基本にしてはいない。

日本語では、子供が「親を尊敬する」とは言っても、親が「子供を尊敬する」とは言わな

である。だから「二つの山々」とか「三人の人々」とは言えないし、「川々」や「犬々」という表現もない。「伊豆の山々」のように、色々な高さや形の山が重なり合うことはあるが、川は重なり合うことがない。また人間には色々なタイプを認めるが、日本では犬には人間のよう（少なくとも表現上は）種類（個性）を認めないのであろう。「私達」「我々」などは複数を示すものではなく、色々な人間がいるということなのである。だからこそ家族の者にはふつつ使わないのである。「奴等」「餓鬼共」「奥さま連中」なども同様である。英語ではmountains, rivers, people, dogsなどみな同じように複数形がある。複数形があるということは個別化することであり、群をなして行動するsheepやcarpの場合には複数形がない。

英語では自分の家族のことを“my folks”と言うことがある。folkは一般の人々(=people)にも使う語である。また家族の一人一人をa memberと言う。これは団体、組織、グループの会員と同じ語であり、memberは相互に対等であることを示す。ただし近年では日本でも「家族の一員」という言葉を使い、一人一人の人格を認める表現になっていると思われる。

## 8. 「私生活、秘密」と privacy

privacyに相当する日本語はない。だから現代では「プライバシー」という外来語をもっぱら使っている。多くの辞書が挙げている訳語の「私生活」や「秘密」もprivacyとは異なる。したがって、ある英和辞書はprivacyの訳を「他人から離れていること、他人にわずらわされないこと」としている。なぜ相当する日本語がないかと言えば、古来日本にはprivacyがなかったからである。家族の一人一人にはもちろんprivacyはなかった。欧米では幼児から個室で生活するのに対して、日本では大半の庶民は家族皆が一日の大半を一つの部屋で生活した。privacyを守るための仕切りとなるべき襖や障子が紙でできていると聞くと欧米人は驚く。Seidenstickerは日本の小説の中に出てくる障子をa sliding doorと訳しているが、a paper sliding door (screen)とすべきであろう。また襖や障子には鍵もかからないし、ノックすれば破れてしまう。昔の旅館では襖一つ隔てて他人が寝ていた。襖はあけようと思えばいつでもあけられるが、あけてはいけない時にはあけないという相互の理解があって初めて部屋の仕切りの役目を果し得る日本的仕切りであった。隣の部屋に自分がいることを知らせようとする時には咳払いなどで知らせた。「察しと思いやりの文化」という日本文化が根底にある。欧米の「鍵文化」に対して、日本は「鍵のない国」と評されたこともあった。トイレにも鍵のない家が多い。アメリカで幼い少女が入っているトイレの扉を日本人がうっかりあけてしまった時、その少女が“I need some privacy.”と叫んだという話がある。これなどは英語に訳せない表現であるが、強いて訳せば「やめて」とか「失礼ね」などとなるであろう。幼

## 7. 「<sup>うち</sup>家の犬」と our dog

英米人、特にイギリス人にとって犬は家族の一員である。日本のように一日中外につないで置くような飼い方はしない。家の中を自由に歩き回ることができ、家族の一人と同じ寝室やベッドで寝ることも自由である。日本でも現在では多くの家でペットとして飼っているが、昔は野良犬が多く、人家に入って来たりすると「この野良犬め！」と棒でなぐられることもあり、『犬も歩けば棒にあたる』ということわざは元来「積極的に行動しようとする、犬が棒で打たれるように、思わぬ不運に会うことがある」という意味に使われた。西洋の狩猟民族にとっては犬は人間の伴侶であり、一緒に仕事をする仲間であったから work like a dog (大いに働く) という idiom もある。日本には「馬車馬のように働く」とう表現はあるが、人間の手伝いとして犬を働かせるという発想はない。

また犬は狩猟の際は人間のために働く動物であり、ある意味では人間に従属する生物とも考えられていたから、その生殺与奪の権も人間が握っており、犬が不治の病にかかったときなどにはイギリス人は銃で撃ち殺すとも言われている。しかし日本人にとっては、犬は人間とは別個の存在であり、その生命を奪う権限を人間に持ち合わせていない。また仏教における「殺生」の禁止もそのような行為を許し難いものにしていよう。これは親と子の関係と考え合わせると興味深いと思う。日本には古来親子心中が後を絶たないが、西洋にはほとんど見られない。「心中」は強いて英訳すれば double suicide となるが、英米人には説明しなければ何のことか分らない。子供を残して死んだあとの子供の苦労を考えると親子心中の気持は理解できないことはないが、親と子は別個の人格であり、親の都合で子供を殺す(道連れにする)権限は親にはない考えるのである。しかし日本人の親にとっては(現代では事情は変っているが)子供は親の分身であり、親に生殺与奪の権限があったわけである。西洋人にとっては、犬はかつての日本の子供と同じ存在なのであろう。したがって表題の our dog と「家の犬」とは connotation が相当に異なると言える。

さらに our dog の “our” の訳にも注意が必要である。直訳して「私達の犬」とは訳せない。日本の家族のように一身同体である人々の集まりには「私達」「我々」という言葉は望ましくないのである。「私達の犬」と訳せば、仲良しの友達が集まって皆が飼っている犬のような意味となる。our sister は「<sup>うち</sup>家のお姉さん」であり、「私達のお姉様」と訳せば、皆が憧れている宝塚のスターのような感じとなる。

日本語には複数を示す文法形式がない。「山々」「人々」を複数を示す表現と考えている人も多いが、これらは複数を示すものでなく、色々な山や人間が集まっていることを示す表現



また「婿」は英語ではson-in-lawであるが、『岩波国語辞典』によれば「婿」は「①娘の夫。特に、娘の夫として家に迎える男。②新婚の夫。」となっており、やはり跡継ぎとし「家」が迎える男を特に指した。このような婿はその家の息子というよりも、家を継ぐ男として迎えられたに過ぎないから、家の中では肩身が狭く、『小糠三合あったら婿に行くな』ということわざもある。

## 6. 「養子」と adopted child

英語のadoptの語源はラテン語でchoose for oneself「(自らに) 選ぶ」という意味である。LDCEのadoptの項には次のようにある<sup>7)</sup>。

1 to legally make another person's child part of your family so that he or she becomes one of your own children.

一方日本語の「養子」と「養子縁組」は『岩波国語辞典』には次のようにある<sup>8)</sup>。

〔養子〕養子縁組によって子となった者。→実子▷法律上、嫡出子としての身分が与えられる。男子を言うことが多いが、養女も法律上は「養子」と言う。

〔養子縁組〕血統の続かない者の間に親子と同じ関係を成り立たせる行為。

この場合もやはりイエ制度が基本となっている。家を継承するために跡継ぎとして貰う男子が「養子」なのである。したがって主に男の子に使うわけである。英語では男女の区別なく家族の一員として迎えることに意味している。「養子」は文字通り「(家を継ぐ者として) 養育する」のであるが、adoptは「(自分の子供として) 選び認める」ことになる。

日本では養子を迎える際、できれば血のつながりのある子供を貰おうとする傾向がある。しかし欧米ではそのようなことに関係なく、私生児や恵まれない境遇の子供など、誰でも養子として迎え入れる。しかも自分自身の子供が何人かいても、更に養子を迎えるのである。アメリカの作家Pearl Buck (1892～1973) も自身の娘もいたが、6人の娘を迎え入れて育てている。欧米人の多くにとって、子供はすべて神の子であり、平等に愛を与えようとする思想が根底にあるが、日本人の場合には自分の「腹を痛めた子」以外本当に可愛がることはできないのである。このような「腹を痛めた子」「腹違いの子」「畑違いの子」などは英語に訳せない表現である。

い」という語は、かつての男性中心の日本社会を示すものであろうが、母親だけしか参加しないのに、いまだ「父兄会」と呼んでいる人がいるのも同様のケースである。

日本では古来、長幼の序が極めて重視されて、兄と弟をbrotherのように同じ語で表わすことは考えられないことであった。弟は兄（特に長男）に仕える者であった。英米では日本のように、長男、二男、三男というような言い方をすることはめったにない。「息子」「娘」だけで十分なのである。しかし日本では家を継ぐ者としての長男が大切なのであり、「総領」として区別する社会であった。また女の子たちはなおさら低い立場にあった。しかし英語にはsibling（兄、弟、姉または妹）という男女の別もつけない語さえ存在しているのである。

#### 4. 「おじ、おば」と uncle、aunt

長幼の序を重んじる日本では、かつては父母の兄（姉）を「伯父（伯母）」、弟（妹）を「叔父（叔母）」と区別したが、近頃では平仮名で「おじ（おば）」と書いて長幼の序はあまり区別しなくなりつつある。また日本語では「おじさん」と言うと、「血のつながりのない、知らない）小父さん」も指すことができるのは英米人にとっては不思議なことでもある。ただしこの場合の「小父さん」は「小父」とは言えない。英語では「伯父、叔父」（uncle）と「小父さん」（a man, a stranger）とは区別される。つまり日本語の「おじさん」は英語のuncleより意味範囲が広いわけである。

日本語の「おじいさん」も同様に血縁関係のある「おじいさん」（grandfather）と血のつながりのない「おじいさん」（an old man）の両方を含む。昔は後者の「おじいさん」には「<sup>おきな</sup>翁」という呼び名があり、「おばあさん」は「<sup>おうな</sup>嫗」と言った。

#### 5. 「嫁」と daughter-in-law

英語には「嫁」に当る語は一次語としては存在しない。daughter-in-law（法律上の娘）という合成語があるのみである。「嫁」は日本のイエ制度の下で「<sup>イエ</sup>家」に隷屈する女であり、働き手として、また「<sup>イエ</sup>家」の跡継ぎになるべき男の子を生むための道具として、その人間性は認められていなかった。「<sup>よめ</sup>姫」という字もあり、「嫁」は「<sup>イエ</sup>家が迎える女」であり、その家の娘という意味はない。「嫁入り」「嫁取り」「嫁引き」などの表現もこれを示している。英語のdaughter-in-lawは「嫁」と異なり、血のつながりはなくても、あくまでも（法律上は）その家の夫婦からみた「娘」である。

同様に「姑」は英語ではmother-in-lawとなる。姑はその家に前からいる「年上の女」の意であるが、英語では「（法律上の）母親」を意味している。

うこともあるが、日本の「家族」は元来イエ制度を基礎にした語であり、familyとは語源的にも異なるのである。「家族」は『岩波国語辞典』には「同じ家に住み生活を共にする血縁の人人」とある<sup>4)</sup>。また『広辞苑』は次のように「家族」を定義している<sup>5)</sup>。

①血縁によって結ばれた生活を共にする人々の仲間で、婚姻に基づいて成立する社会構成の一単位

②家の旧制度の下で、戸主の統率した家の構成員。原則として戸主の親族でその家を構成する者及びその配偶者

この「同じ家に住む」という点が日本的である。また「家」の制度が定められていた旧民法の下では、戸主と戸籍を同じくし、戸主の統率する家を構成する親族およびその配偶者を法律上家族と称したわけである。

ただし語源的には英語のfamilyも同じような由来を持っている。familyの元のラテン語familiaの第一の意味はservantで「召使い」とか「奴隷」といった意味であった。のちその「召使い」の仕えている家（家族）という意味になったのである。なぜfamilyという語が元来「召使い」という意味だったのかについては、当時男が主人であり、それ以外（妻も子供も）はすべて父親に仕える召使いであったということが推察される。Shipley (1945) には次のように記述されている<sup>6)</sup>。

There is history hidden in this word, from L. familia, household, from famulus, servant. At one time, the man was master, the woman probably seized in conquest, she and all her offspring the servants of the man.

### 3. 「兄、弟」と brother

brotherに当る日本語は存在しない。したがって英文の中にbrotherという語が出てきたら、前後関係で兄か弟かを判断する必要がある。判断できない場合には「兄（弟）」と訳すしか方法がない。brotherという複数形ならば「兄弟」と訳すことができる。なおこの「兄弟」は兄と弟だけでなく、姉と妹も含めて言うことができる。特に「きょうだい」と書けば兄弟姉妹を表せる。逆に「姉妹」「しまい」で兄弟を含めることはできない。日本語で「きょうだいは何人ですか」と聞けるが、英語では“How many brothers and sisters do you have?”と聞いて、あとで兄弟と姉妹の数を合計して判断するしかないわけである。日本語の「きょうだ

語義範囲の日英のズレについては、これまでも一部の語彙について研究がなされているが、あまり系統立った研究は見られないし、特にその背景となる文化的意味や連想については今後の研究に俟つ部分が多いと思われる。本稿では家族内の人間関係を示す語を中心に日英比較を行ない、筆者なりの文化意味論を展開してみたい。

## 2. 「家族」と family

familyは「家族」よりも意味が広い。*Longman Dictionary of Contemporary English* (略称LDCE) のfamilyの説明は次のようになっている<sup>2)</sup>。

1 a group of people who are related to each other, especially a mother, father, and their children

2 all the people you are related to, including those who are now dead: I'm moving to Detroit because I have some family there.

また*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (略称OALD) にはfamilyの2番目の意味として次のようにある<sup>3)</sup>。

(b) a group consisting of one or two parents, their children and close relations

LDCEの2の意味およびOALDの(b)の意味から察すれば、日本語の「家族」と違ってfamilyには「親族」「親類」の意味があるわけである。イギリスではfamilyには召使いも含めることもある。

「親類、親戚」にはrelative, relationが対応する語となっているが、この2語ともLDCEではその意味をa member of your familyとしており、OALDもa person in the same family as anotherとしている。したがって日本の英和辞典がrelativeやrelationに「親類」という訳語を与えているのは正しくない。「(家族を含めた) 血縁関係にある人」とでもすべきであろう。日本語では通常「家族」と「親類」は一方が他方を含むという関係にはなく、この2つの語は別の人間を指すのである。英語では家族の者が一番近いrelativeになるのである。つまり、relativeもfamilyもその意味範囲が日本語の「親類」や「家族」が表す意味範囲よりも広いということである。

近年では「ファミリー」というカタカナ語で、従来の「家族」と異る、より広い意味に使

# 日英語対応語義範囲のズレと文化的背景

——家族内の人間関係を示す語を中心に

奥 津 文 夫

## 1. はじめに

日本の親族名称や呼称には古いイエ制度を基本として造られた語彙が多いため英訳するのが困難な場合が多い。また「家族」とfamily、「親類」とrelative、「養子」とadopted childなどのように訳語が大体決まっているものでも、その意味範囲やconnotationには多かれ少なかれズレがある場合が多いし、「兄」「弟」「嫁」「姑」のように、一次語としては英語には存在しない語もある。また「孝」「恩」のように英語にはその概念がない語彙もある。さらに「お兄さん」「お姉ちゃん」「おじ様」などのように、日本語固有の呼称も多い。日本の文学作品を多く翻訳したSeidensticker (1962) は『細雪』の中の「姉ちゃん」「雪姉ちゃん」の英訳について次のように述べている<sup>1)</sup>。

「姉ちゃん」とか、「雪姉ちゃん」などは、英語では何れも「鶴子」とか「雪子」という固有名詞にしておいた。日本語の「姉さん」とか、「姉ちゃん」とか、「雪姉ちゃん」などは、それぞれにニュアンスの違いがにじみ出ているけれども、英語ではとうていこのようなニュアンスを出すことはできない。その上、英語では「姉さん」とか、「兄さん」と呼ばないで、名前を呼びすてにするのが普通である。これらの理由から、いずれも固有名詞にした。

しかしタテ社会の日本においては家族の中で、自分より年上のきょうだいを名前で呼びすてにすることは許されないことであり、自分との関係を示す語で「お姉ちゃん」とか「姉」とか言わなければならない。呼称の場合には「お姉ちゃん」「お姉さん」となり、姉は妹に対しては「正子」のように名前で呼びかけるのがふつうである。これはfirst nameを最も大切にし多用する英米の慣習とは本質的に異なるのである。